

症の一次的根治術を受けた。生後7ヶ月頃より食べたものを時々嘔吐するようになった。1才3ヶ月時に行った食道透視にて先天性食道狭窄症を疑い手術施行。気管原基迷入型先天性食道狭窄症であった。

7 肝脱出を伴った右側先天性横隔膜ヘルニアに対する治療経験

小林久美子・窪田 正幸・奥山 直樹
平山 裕・渡邊 真実・佐藤佳奈子
新潟大学大学院小児外科学分野

肝脱出を伴うまれな右横隔膜ヘルニア2例を経験した。

〔症例1〕 女児，38週5日，正常分娩，出生体重2690g。肝右葉のみを内容とする右横隔膜ヘルニアで，4生日に経胸的にヘルニア囊縫縮を施行したが，右肺の拡張は不良であった。血管造影で肝と右肺に異常血管交通が発見され，1歳1ヶ月時に経腹的に異常血管を切離後，肝右葉を部分切除し横隔膜を閉鎖した。

〔症例2〕 男児，出生前診断右横隔膜ヘルニア。39週3日，正常分娩，出生体重2870g。肝右葉と腸管をヘルニア内容とし，3生日に経腹的手術施行した。腸管整復後に，肝の整復を試みたが経腹的には授動不可で，肝を残し横隔膜を一部肝に縫着する形でヘルニア門を閉鎖した。

2児とも術後経過は良好である。

8 葛西手術後ドレーンより多量の胆汁排出をみた胆道閉鎖症例

村田 大樹・内山 昌則・須田 昌司*
丸山 茂*・星名 潤*
県立中央病院小児外科
同 小児科*

在胎39週3138gにて出生の男児。生後2～3週間目からクリーム色の便，やがて黄疸と灰白色便を認めるようになり，生後41日目に当科受診した。検査にて胆道閉鎖症と診断し，生後47日目に葛西手術を行った。術後は3日目から胆汁混じ

りの排便を認めた。術後5日目頃よりドレーンからの腹水の流出が増加し，生化学検査ではビリルビンを含んでおり，肝門部空腸吻合部からのリークが考えられた。術後10日から流出胆汁を回収し経鼻胃管から注入した。やがて流出は減り始め，術後16日目にはリークはなくなり，胆汁は全て腸管内に流入した。血中ビリルビン値は順調に低下し，術後38日目に1.0mg/dL以下となり，経過良好にて術後61日目に退院となった。

9 陰嚢水腫と鑑別を要した陰嚢内嚢胞の1例

近藤 公男・大澤 義弘

太田西ノ内病院小児外科

症例は3才，男児。右陰嚢腫大を主訴に当科を初診した。触診にて右陰嚢に4×4×3cm大のやや青みがあった凹凸のある嚢胞性腫瘤を認め，その近傍に正常大の精巣を認めた。エコーでは多房性嚢胞が疑われた。以上より，陰嚢水腫または陰嚢内多房性嚢胞の診断で手術を施行した。精巣は正常の部位に認め，形態，大きさ共に異常を認めなかった。嚢胞性腫瘤は精巣導帯よりも更に末梢の陰嚢側に存在し，陰嚢水腫は否定された。嚢胞は4×3×3cmの多房性腫瘤で容易に全摘可能であった。病理組織診断はリンパ管腫であった。リンパ管腫の発生部位として陰嚢は稀とおもわれ，若干の文献的考察を加え報告する。

10 当院の局麻下胸腔鏡検査の現状と成績

渡辺 健寛・広野 達彦

国立病院機構西新潟中央病院呼吸器外科

【目的】 胸膜病変，原因不明胸水の診断目的に局麻下胸腔鏡が導入されてきた。その成績をまとめ解析した。

【方法】 2001年1月から2006年12月までに局麻下胸腔鏡検査を行った症例を対象とし，その内容を検討した。

【成績】 対象症例は17例，全例男性。平均年齢63歳。11例にアスベスト吸入歴を認めた。全例局所麻酔下に検査を行い，1例に硬膜外麻酔を併用